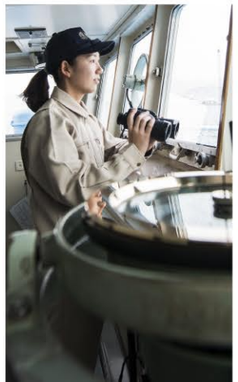
卒業生に聞く8

経験がものをいうのは、船上もグラウンドも同じ

長崎大学水産学部附属練習船長崎丸　二等航海士
楠本成美



くすもとなるみ
長崎市生まれ。長崎大学水産学部卒業後、東京海洋大学水産専攻科修了。株式会社十八銀行本店営業部勤務を経て、2016年長崎大学へ。三級海技士、第一級小型船舶などの船舶関連資格の他、日本サッカー協会認定女子一級審判員の資格を持つ。

毎日条件の違う海で船を操る難しさ

長崎大学の水産学部は二隻の練習船を持っており、学生の乗船実習や研究調査を目的に運航しています。その一つ、長崎丸に二等航海士として乗務しているのが楠本成美さん。長崎大学水産学部出身です。

「今の仕事は船の運航と学生への指導が主です。学生の実習では操舵室で機器の操作方法を教えることもあります。昨年十一月は四年生の乗船実習が十六日間あり、瀬戸内海を抜ける航路を運航してきました」。

瀬戸内海……波も穏やかで楽しいクルーズのようですね。

「いえいえ、非常に緊張感の高まる航路ですよ。日本の航路の中でも船の交通量が特に多く、通る場所によって交通の決まりごとも複雑です。あの船がこう来そうだからこう避けようという事前の判断や動作は、理屈より体で覚える感じですね。海はその時その時で、波、風、視界、他の船舶の状況などすべて条件が違います。その中で、調査のために同じ海域にぴたりと船を止めることを求められることもあります。経験を積み重ねてスキルを身に付けて行くしかありません。難しいけれど、達成できたときの醍醐味もありますね」。

航海士とサッカーの審判員

水産学部から東京海洋大学水産専攻科へ進んで航海の技術を磨き、航海士まっしぐらのキャリアを歩んだかに見える楠本さん。しかし卒業後は銀行勤務の時代がありました。

「一年半ほど、地元の銀行で働いていました。どうしても陸に上がって土日が休みの仕事を選びたかったのです」。

その理由は楠本さんのもう一つの肩書にありました。なんと、サッカーの審判の資格を持っているのです。それも1級！

「日本サッカー協会認定の女子1級審判員です。長崎県内で現在活動している女子1級の審判員は私一人。1級審判員は誰でもなれるわけではなく、資格審査を受けるための推薦も、年に数名だけです。六年前、長崎国体を前に『上級を目指してみないか』と声をかけていただいたので、とにかく資格取得に向けて集中するため陸上勤務である銀行の仕事を選びました」。

中学生の頃男子に交じってサッカーをしていた楠本さん。あるとき、女子が出場できない試合で帯同審判員としてチームに貢献できると思い4級を取ったのがきっかけだそうです。難関をパスして見事女子1級審判員になってからは、本来目指していた航海士の仕事に転職。今では航海を終えて陸に上がると全国の試合に駆け付けています。この世界では、審判をすることを「（ホイッスルを）吹く」というそうです。四級は市の試合、三級は県、二級は九州、そして一級は全国大会で吹くことができます。

「女子サッカーの『なでしこリーグ』も吹きますよ。基本は女子のゲームですが、男子の高校総体や選手権の予選の審判もします。試合では、選手から不満を言われたりサポーターからヤジが飛んできたりすることもありますが、自分の決定を貫き通す意志の強さも必要です。正確な判定のためには、ボールが蹴られてから走りだしても間に合いません。次はここへパスが出され、この選手が走っていってこのあたりで接触があるかもしれない……そう常にいくつものパターンを予測しながら走ります。同じゲームは一つもなく、試合中はその瞬間その瞬間でいくつもの判断をし、一試合通すと何百という判断と対処をしなければならないので、多くの経験が必要です」。

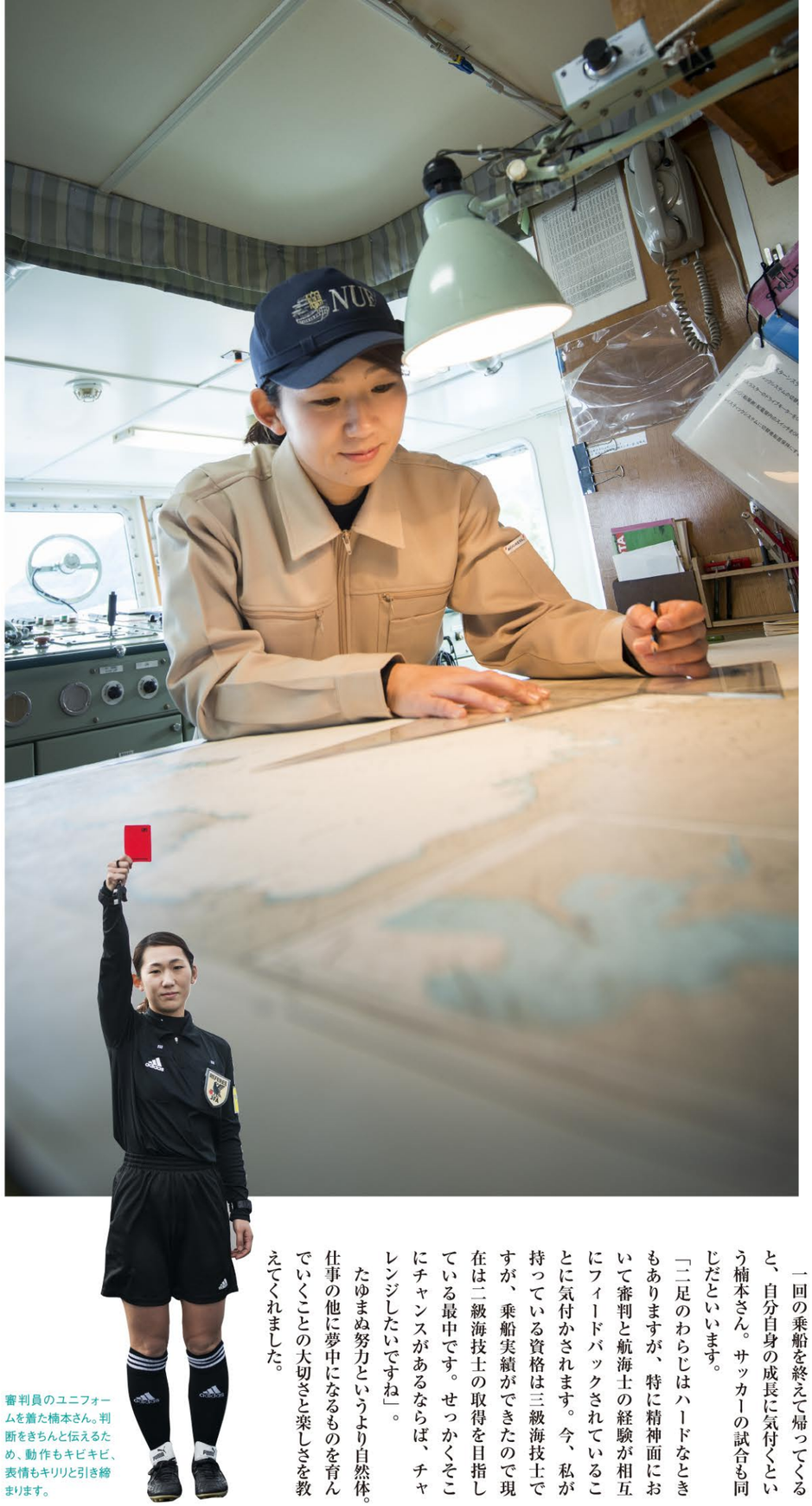
それは本業にも通じますね。

「そうですね、現場の動き方の基本は船もサッカーも共通点は多いですよ。船の上で学生と過ごすときも、彼らの次の動きや展開を予測しながら適切な指示を出します。両手をふさいで物を持ち運びしている学生を見て、今もし揺れたら危ないなとか、ワイヤーの下に入るのは止めさせようとか。ロープの結び方にしても、ただ覚えるだけでは、その一本がゆるいと事故につながるということが最初はピンとこないものです。私自身も学生の頃乗船実習でずいぶん失敗をやらかしました。それが今では大切な経験として指導に生きています」。

一回の乗船を終えて帰ってくると、自分自身の成長に気付くという楠本さん。サッカーの試合も同じだといいます。

「二足のわらじはハードなときもありますが、特に精神面において審判と航海士の経験が相互にフィードバックされていることに気付かされます。今、私が持っている資格は三級海技士ですが、乗船実績ができたので現在は二級海技士の取得を目指している最中です。せっかくそこにチャンスがあるならば、チャレンジしたいですね」。

たゆまぬ努力というより自然体。仕事の他に夢中になるものを育んでいくことの大切さと楽しさを教えてくれました。



審判員のユニフォームを着た楠本さん。判断をきちんと伝えるため、動作もキビキビ、表情もキリリと引き締まります。